

トマス・アクィナスと天使の個体化

——個体化の原理の射程をめぐって——

石 田 隆 太

序

トマス・アクィナスの著作においては、個体化の原理（*principium individuationis*）という概念が明示的に適用されるのはほとんど質料に対してであると言ってよい¹⁾。これは遡ればアリストテレスに由来する考え方であるとトマスは理解している²⁾。この考え方は、当然のことながら質料形相論という枠組みを前提としており、質料と形相からなる複合実体に対して適用される原理である。その場合、複合実体の形相は種的形相としては共通のものであり、単独では個的なものではないとされる。それゆえ、或る複合実体がこの世界で個体として存在するためには、形相ではなくて質料が個体化の原理として機能しなければならないというのがトマスの考えである³⁾。さらに言うなら、形相だけではなくて質料もそれ自体では共通のものとして或る複合実体の本質に含まれている。それゆえ、厳密に言うなら、特定化された質料が個体化の原理としてはふさわしいことになる⁴⁾。この特定化された質料によって個体化された

* 本稿は、2016年11月に早稲田大学で開催された中世哲学会第65回大会での発表原稿に修正を加えたものであり、JSPS 科研費 17J00136 の助成を受けたものである。

** 一次文献からの引用文はすべて拙訳であり、[] は訳者による補いである。

*** 引用および参照を行ったトマスの著作の校訂版としては、*Corpus Thomisticum* (<http://www.corpusthomisticum.org/reoptedi.html>) で最良の版として列挙されているものを使用した。

1) Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.* I, d. 36, q. 1, a. 1, c.; II, d. 3, q. 3, a. 3, c.; IV, d. 50, q. 1, a. 3, c.; *De veritate*, q. 2, a. 5, c.; *Contra Gentiles* I, c. 44; II, c. 100; IV, c. 63; *ST I^a*, q. 86, a. 3, c.; *Q. d. de anima*, q. 20, c.

2) Cf. Thomas Aquinas, *Sententia Metaphysicae* VII, l. 15.

3) Cf. Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, q. 4, a. 2, c.

複合実体は、同一の種の中で数的に区別されているという意味で個性を持つことになる。それでは、トマスの思想において、個性化の原理とは以上のような複合実体にのみ適用される原理であると断言してよいのだろうか。この問いをめぐって、個性化の原理という概念の射程に純粋な霊的被造物とされる天使⁵⁾が含まれているのか否かを検証することが本稿の目的である。

そのためには、天使に関するトマスの根本的な二つの主張と向き合うことになる。一つは、同時代人のボナヴェントゥラとは異なり、天使が非質料的であると主張したことである⁶⁾。この主張に基づくなら、天使は非質料的であるがゆえに質料による個性化を蒙らないことが明らかになる。すなわち、天使にとって質料は個性化の原理になりえない。むしろ、敢えて言うなら、天使にとって個性化の原理は形相であるということになるかもしれない。実際、このような解釈自体は、既に複数の研究者によって何らかの形で示されている⁷⁾。そもそも、質料との複合を含まない単純実体（天使および神のこと）の単純性を論じるトマスの議論がそのように解釈することを可能にしている。このように考える限り、質料的な存在者と非質料的な存在者との間で個性化の原理は多様化していることになる（第1節）。

次に、天使に関するトマスのもう一つの根本的な主張を考え合わせても、質料を含む複合実体と天使との間で、個性であることそのものの多様性が窺える。それは、天使の数があるだけ天使の種があるという主張である⁸⁾。この主張に基づくなら、複合実体には一つの種に多数の個性があるという構成になるのに対して、天使には多数の個性があるだけ多数の種があるという構成になる。ここからは、複合実体においては個性

4) Cf. Thomas Aquinas, *De ente et essentia*, c. 2; *Super De Trinitate*, q. 4, a. 2, c.

5) Cf. Thomas Aquinas, *ST I*^a, q. 50, pr.

6) Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.* II, d. 3, q. 1, a. 1; *Quodlibet IX*, q. 4, a. 1; *Contra Gentiles* II, c. 50; *De spiritualibus creaturis*, a. 1; *ST I*^a, q. 50, a. 2; *De substantiis separatis*, cc. 5-8.

7) Cf. L. Dewan, *Form and Being: Studies in Thomistic Metaphysics*, The Catholic University of America Press, 2006, pp. 245-7; 山田晶「トマス・アキナスにおける個物の問題」『中世思想研究』第28号, 1986年9月, p. 25.

8) Cf. Thomas Aquinas, *De ente et essentia*, c. 5; *Super Sent.* II, d. 3, q. 1, a. 4; IV, d. 12, q. 1, a. 1, qc. 3, ad 3; *Contra Gentiles* II, c. 93; *De spiritualibus creaturis*, a. 8; *ST I*^a, q. 50, a. 4.

化という事態だけが見られるのに対して、天使においては種別化としての個体化という事態が見られるという図式を得ることができるだろう⁹⁾。したがって、複合実体および天使がそれぞれ何らかの意味で個体であることは認められるとしても、個体化という事態の内実は多様化していることになる（第2節）。

しかしながら、個体化およびその原理という概念には、質料的な存在者と非質料的な存在者とで共通する側面を見出すことも可能であると思われる。これは、質料にせよ形相にせよ、何故にそれらがそもそも個体化の原理であると言われるのかという点に関わる。個体化の原理のいわば本質的規定とでも言うべき側面を見出すことは、個体化をめぐるトマスの思想を統一的な理論として捉えることを可能にする（第3節）。

個体化の原理のいわば本質的規定を理解することによってはじめて、天使に対して個体化の原理が何であるのかという問題に適切な仕方で答えることができるようになる。第1節および第2節でも確認したように、個体化およびその原理は、質料的な存在者と非質料的な存在者とで実際には多様化されている。そのことだけに基づいても、たしかに天使に対して個体化の原理を措定することは可能であった。しかしながら、より重要であるのは、どのような意味で天使に対して個体化の原理が措定されるのかということである。この点を考慮しながら、改めて天使に対して個体化の原理をどのように措定できるのかを検討することにしたい（第4節）。

第1節 質料的な存在者と非質料的な存在者における 個体化の原理の多様性

『神学大全』では、神の単純性が語られる中で、質料に受容される形相とそうでない形相の個体化が対比的に論じられている。

9) この点は先行研究でも天使の個体化として議論されている。Cf. G. Pini, "The Individuation of Angels from Bonaventure to Duns Scotus", T. Hoffmann (ed), *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, Brill, 2012, pp. 84-94; R. Wood, "Angelic Individuation according to Richard Rufus, St. Bonaventure and St. Thomas Aquinas", J. A. Aertsen & A. Speer (eds), *Individuum und Individualität im Mittelalter*, Walter de Gruyter, 1996, pp. 221-8.

質料において受容されうるものである諸形相は、他のものには存在しえない質料を通じて個体化される。というのも、質料は〔その諸形相の〕基底にある第一の基体だからである。それに対して、形相は、それ自体に関する限り、他の何かが妨げるのでないとするなら、複数のものによって受容されうる。しかし、質料において受容されうるのではなくて、自身を通じて自存するものであるような形相は、他のものにおいて受容されえないというまさにそのことに基づいて個体化される。そして神はこのような形相である¹⁰⁾。

一般的には、形相は複数のものによって受容されうるものだとトマスは考えている。それゆえ、質料に受容されうる形相は、自らの内には個的なものであることの根拠を持たないがゆえに、質料を通じて個体化される。この場合の個体化の原理はもちろん質料である。それに対して、自身を通じて自存する形相はその限りではない。そのような形相は自らの内に個的なものであることの根拠を既に持っている。別の言い方をすれば、自身を通じて自存する形相は「自身を通じて個体化されている」¹¹⁾。このことから、個的なものであることの根拠の担い手を個体化の原理であるとするなら、非質料的な存在者にとって個体化の原理は形相であると見なすことは十分に可能であろう¹²⁾。

上述の引用は主題的には神について言われていることであるが、同様のことは天使が主題になっている箇所でも言われている。例えば、『定期討論集 霊的被造物について』において、天使が身体と合一するか否かが議論されている箇所の中の一節を挙げることができる。

質料は、それが他のものにおいて受容されることが本性づけられていない限りにおいて、個体化の原理である。それに対して、何らか

10) Thomas Aquinas, *ST I^a*, q. 3, a. 2, ad 3.

11) Cf. Thomas Aquinas, *ST I^a*, q. 3, a. 3, c.

12) Cf. 『トマス・アクィナス 神学大全 I』山田晶訳, 中央公論新社, 2014年, p. 126. そこで山田は当該箇所に関する訳注として次のようなことを述べている。「トマスは質料があらゆる意味で「個体化の根原」であるといっているのではなく、特に質料的物におけるそれであるといっているのであり、非質料的存在者の領域に関しては、各存在者の「形相」をもって個体化の根原としている点にまず注意すべきであろう」。

の基体において受容されることが本性づけられている諸形相は、それ自体で個体化されたものではありえない。なぜなら、自分の根拠に関わる限り、その諸形相が一つのものに受容されるのか複数のものに受容されるのかはその諸形相にとって無差別だからである。しかるに、もし何らかのものにおいて受容されうるものではないような何らかの形相があるとするなら、その形相はまさにそのこと [すなわち、何らかのものにおいて受容されうるものではないこと] に基づいて個体化を保持する。なぜなら、その形相は複数のものに存在しうるのではなくて、自身だけが自分自身の内に留まるからである¹³⁾。

この引用文に基づいても、質料的な存在者との対比で、非質料的な存在者にとって個体化の原理は形相であると解釈することは可能である。したがって、本節の議論からは、質料的な存在者と非質料的な存在者とで個体化の原理が多様化しているという解釈の可能性を提示することができる¹⁴⁾。ただし、質料的な存在者にとって個体化の原理がより厳密には特定化された質料だと同定されたのと同様の考察がさらに必要である。すなわち、神と諸天使にとっては、どのような意味で形相が個体化の原理として捉えられるのかを吟味する議論が少なくとも必要になってくる。このことの検討は第4節で行われることになる。また、上記二つの引用箇所は、個体化の原理のいわば本質的規定について考察する第3節でも再び俎上に載せられることになる。これらの引用箇所が本稿にとって最も重要な箇所であることを予め述べておきたい。

第2節 天使における種別化としての個体化の意味：個体化の多様性

本節では、天使の数があるだけ天使の種があるというトマスの根本的な主張が展開されている議論を参照する。ここでは、叙述が最も秩序立っている¹⁵⁾ 『靈的被造物について』第8項の主文を主な素材としよう。

13) Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 5, ad 8.

14) Cf. 石田隆太「《individuatō》と《principium individuationis》の多様性——トマス・アクィナスによる個の思想の一側面」『哲學』（日本哲学会）第67号，2016年4月，pp. 153-68.

そこでトマスは、天使相互の異なりが種的なものであるのか否かを三つの論拠に基づいて論証する¹⁶⁾。第一の論拠は、天使の実体のあり方に基づいており、具体的には非物体性と非質料性を根拠に据える議論であると言える。『命題集』注解』における平行箇所の主文では、非物体性と非質料性にのみ基づいて、一つの種に複数の天使が属するのではないことが論証されていた¹⁷⁾。次に、第二の論拠に基づく論証は、宇宙の完全性を根拠に据える議論であると言える。そこでは、宇宙の完全性をより多く分有すべきものとして天使が位置づけられている。

本稿と最も関連のあるのは第三の論拠に基づく論証である。それは天使の本性の完全性という論拠に基づいている。まず完全性の諸段階が、完全性の最上位にある神と、最下位の部分にある生成消滅するものという両極端にあるものから考察されていく。神には存在全体の根拠に属することが何も欠けていない。それに対して、生成消滅するものには、自分の個体化の根拠に関して属することは何も欠けていないが、自分の種の本性に属することが何も欠けていないわけではない。その理由としてトマスが考えているのは、種の本性は生成消滅するものの一個体においては永続できないので、種の本性そのものはその種に属する個体すべてによって担われなければならないということであろう。こうした両極端にあるものに基づく、トマスによれば、一つの種に一つの個体しかない太陽などの不可滅的な天体には固有の種に属することが何も欠けていないことがわかる。天体の場合、固有の種に属することの中には質料も含まれている。他方で、天体よりも上位のものとされる天使においては、質料が含まれることなしに——ここでは非質料性が既に前提されている——種全体に属することが何も欠けていないことになる。したがって、天使においても一つの種に複数の個体が属するという構成が認められるべきではないとされる。それに対して、神の場合は、種だけではなくて類においても、他のいかなるものとも一致が認められない。それゆえ、天使においては、同じ種という点で複数の天使同士が一致しているので

15) Cf. T. Suarez-Nani, *Les anges et la philosophie: Subjectivité et fonction cosmologique des substances séparées à la fin du XIII^e siècle*, Librairie philosophique J. Vrin, 2002, p. 39.

16) Cf. Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 8, c.

17) Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.* II, d. 3, q. 1, a. 4, c.

はなくて、天使といういわば類の下に複数の種が認められるという構成になるだろう。

以上の論証に基づくなら、複合実体においては個体化という事態だけが見られるのに対して、天使においては種別化としての個体化という事態が見られるという図式を得ることができる。個体化という概念自体が天使に対しても明示的に適用されていることは、『靈的被造物について』の同じ項にある別の箇所からも窺える。

諸天使において個体化があるのは、質料を通じてではない。そうではなくて、諸天使が、[主文において] 既述のように、基体ないし質料において存在することが本性づけられていない、自身を通じて自存する形相であるということを通じてである¹⁸⁾。

さらに、質料に受容されるような形相とそうでない形相の個体化が多様化しているという側面は、次の箇所でも強調されている。

基体ないし質料においてある形相が、このものにおいて存在することを通じて個体化されるのと同様にして、[質料から] 分離された形相は、[他の] 何らかのものにおいて存在することが本性づけられていない¹⁹⁾ ことを通じて個体化される。というのも、このものにおいて存在することが、多数のものについて述定される普遍的なものの共通性を排除するのと同様にして、[他の] 何らかのものにおいて存在することができないこともそうである [すなわち、普遍的なものの共通性を排除する] からである。したがって、この白さが自分の下に多数の個体を持つということが妨げられるのは、それが白さであるということ——それは種の根拠に属する——に基づいてではなくて、それがこのものにおいて存在すること——それは個体の根拠に属する——に基づいてである。それと同様にして、この天

18) Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 8, ad 13.

19) *Corpus Thomisticum* では「本性づけられている」となっているが、後で引用する『「原因論」注解』からの引用箇所との整合性を保つために、ここではレオ版が採用している「本性づけられていない」という読みを保持する。

使の本性が多数のものにおいて存在するということが妨げられるのは、それが諸事物のしかじかの秩序における本性であること——それは種の根拠に属する——に基づいてではなくて、それが [他の] 何らかの基体において受容されることが本性づけられていないこと——それは個体の根拠に属する——に基づいてである²⁰⁾。

特に注目すべきは、白さという附帯形相と天使の本性という実体形相を例にしている後半部である。附帯形相が個であることは「このものにおいて存在すること」である一方、天使の本性が個であることは「[他の] 何らかの基体において受容されることが本性づけられていないこと」であると言われている。この点を踏まえるなら、まず質料的な存在者が個体であることは、個的な基体において存在することを意味する。次に、非質料的な存在者が個体であることは、他の基体にそもそも受容されえないことを意味する。したがって、本節の議論からは、質料的な存在者と非質料的な存在者とで個体化という概念そのものが多様化しているという解釈の可能性を提示することができる²¹⁾。

第 3 節 非受容性の根拠としての個体化の原理

個体化およびその原理という概念がそれぞれ多様化していることを認めた場合、これらの概念は全くもって同名異義的に使用されていることになるのだろうか。もし同名異義的な仕方でのみこれらの概念が使用されていることを認めてしまうと、トマスには個体化をめぐる様々な思想はあるにしてもそれらを一つの理論と呼ぶことは難しくなるだろう。このことを見極めるためには、トマスが結局のところ個体化およびその原理について何か本質的な規定を想定していたかどうかを検証することが必要になる。

ここで鍵となるのが、第 1 節で取りあげた二つの引用箇所である。その内、『靈的被造物について』第 5 項第 8 異論解答からの引用箇所を一部再掲する。

20) Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 8, ad 4.

21) Cf. 石田「《individuatō》と《principium individuationis》の多様性」, pp. 155-9.

質料は、それが他のものにおいて受容されることが本性づけられていない限りにおいて、個体化の原理である。……しかるに、もし何らかのものにおいて受容されうるものではないような何らかの形相があるとすると、その形相はまさにそのこと〔すなわち、何らかのものに受容されうるものではないこと〕に基づいて個体化を保持する²²⁾。

ここでは、他のものに「受容されることが本性づけられていない」ないし「受容されうるものではない」ということを、質料ないし形相のそれぞれが個体化の原理であることの前提として理解できる。言い換えるなら、他のものに受容されることがありえないという非受容性の根拠であることを個体化の原理の本質的規定として取り出すことができないだろうか。特に強調すべきは、質料が個体化の原理である場合にも、質料が個体化の原理である理由がその非受容性に還元されているということである。第1節で取りあげたもう一方の引用箇所でも、「他のものには存在しえない質料」という言い方が見られることは十分に傍証になるだろう²³⁾。

しかしながら、前節で引用した『靈的被造物について』第8項の第4異論解答では、そのような非受容性が質料に対しては述べられていないように思われる。そこでは、質料に受容される形相は「このものにおいて存在することを通じて個体化される」としか言われていない。ところで、質料的な存在者の個体化にとっては、次元量という附帯性によって特定化された質料こそが個体化の原理であるというのがトマスの基本的な考えである²⁴⁾。したがって、質料的な個体における非受容性の本来の在り処は、質料そのものというよりは、次元量をもたらす指定性にあるというのが厳密な捉え方と言える。このことに基づくなら、非受容性の根拠と非受容性の基体が質料的な存在者においては区別されていると考えられる。

この点に関しては、神の三位一体をめぐる議論においてトマスが個体

22) Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 5, ad 8.

23) Cf. Thomas Aquinas, *ST I^a*, q. 3, a. 2, ad 3.

24) Cf. Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, q. 4, a. 2, c.

化について述べている箇所をも参照する必要がある。例えば、『命題集』注解』では次のように言われている。

複合された諸事物においてある限りでの個体化においては、二つのことを考察することができる。すなわち第一は、個体化の原因——それは質料である——のことであり、こうしたことに即して個体化が神のものども〔すなわち神の三つのペルソナ〕に転用されるのではない。そして第二は、すなわち個体化の根拠——それは共通化不可能性の根拠である——のことである。……そしてその場合には、個体化は神に適合する²⁵⁾。

まずこの箇所を踏まえるなら、非受容性の根拠および非受容性の基体という区別を「個体化の根拠」(ratio individuationis) および「個体化の原因」(causa individuationis) の区別として捉えることができるようになる。対応する異論では「個体化の原理」が質料であると言われていたが²⁶⁾、ここでトマスは、「個体化の根拠」の側面を取り出すために「個体化の原因」という言い方を採用していると考えることができる。

さらに『定期討論集 神の能力について』にある次の箇所も、そのような区別に対する言及として読めないだろうか。

被造的諸事物においては、個体化をもたらす諸原理は二つのことを保持している。それらの内の一つは、自存することの原理であるということである（というのも、共通本性は、単一のものどもにおいてでなければ、それ自体で自存しないからである）。もう一つは、個体化をもたらす諸原理を通じて共通本性の担い手が相互に区別されるということである²⁷⁾。

ここまで問題にしてきた非受容性の根拠は、ここでの言い方を借りるなら「自存することの原理」という側面のことであったと言えるだろう。

25) Thomas Aquinas, *Super Sent.* I, d. 25, q. 1, a. 1, ad 6.

26) Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.* I, d. 25, q. 1, a. 1, arg. 6.

27) Thomas Aquinas, *De potentia*, q. 9, a. 5, ad 13.

それとは別のこととして、「共通本性の担い手が相互に区別される」ということが捉えられている。これは、非受容性の基体としての側面のみを取り出した規定として理解できる²⁸⁾。

『命題集』注解』と『神の能力について』からの引用箇所を比べた場合、それぞれの箇所で言及されている個体化の対象領域には相異がある。すなわち、前者では質料的な存在者において「個体化の原因」と「個体化の根拠」が区別されていた。それに対して、後者ではこうした二つの要素が被造物一般において区別されている。『神の能力について』の方では、対応する異論において質料的な存在者のみならず天使のことも念頭に置かれていたために、このような説明の仕方が採用されていると言える²⁹⁾。

質料的な個体においては、非受容性の根拠は厳密には次元量をもたらす指定性に求められる。他方で、非受容性の基体としての役割は質料に求められるだろう。それでは、非受容性の根拠と非受容性の基体は天使においてはどのように見出されることになるのだろうか。

第4節 天使における個体化の原理の措定

まずは、これまで取りあげてきた引用箇所の中から、本節にとって重要な部分を改めて列挙してみることにしよう。

もし何らかのものにおいて受容されうるものではないような何らかの形相があるとするなら、その形相はまさにそのこと [すなわち、何らかのものにおいて受容されうるものではないこと] に基づいて個体化を保持する³⁰⁾。

諸天使において個体化があるのは……諸天使が、[主文において] 既述のように、基体ないし質料において存在することが本性づけら

28) Cf. 加藤雅人「トマスにおける『個』の意味」『中世思想研究』第27号、1985年9月、p. 137. 加藤も、複合実体の個体化に関しては「自存」と「区別」の二面性があることを指摘している。

29) Cf. Thomas Aquinas, *De potentia*, q. 9, a. 5, arg. 13.

30) Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 5, ad 8.

れていない、自身を通じて自存する形相であるということを通じてである³¹⁾。

いずれの箇所においても、天使の個体化にとっての非受容性をもたらすものとして天使の形相が捉えられている。さらに、質料的な存在者とは異なり、天使の形相は非受容性の根拠でもあるのと同時に、非受容性の基体にもなっていると思われる。上記引用箇所の後半部でも言われているように、天使が持つような形相は「自身を通じて自存する形相」である。すなわち、天使のような非質料的な存在者が持つ形相は「自身を通じて個体化されている」³²⁾。それゆえ、質料的な存在者において質料が非受容性を獲得するために次元量による媒介を必要としたような構図は天使には当てはまらないだろう。

ここまでの議論によって、天使に対して個体化の原理をどのように定式化できるのかということの出発点にわれわれはようやく立つことができたと言える。第1節でも既に確認したように、基本的には天使に対して個体化の原理は形相であると見なす解釈を採用したい。その上で、本節ではこの解釈をより精緻化して提示することを目指すことにしよう。

まず形相が個体化の原理であると措定しただけでは、天使と同じように単純実体でありかつ天使よりも完全なものである神との差異化が達成されない。この点について興味深い示唆を与えてくれるのは、『「原因論」注解』の次の一節である。

[他の] 何らかのものにおいて存在することが本性づけられていないものはすべて、まさにそのこと [すなわち、何らかのものにおいて存在することが本性づけられていないこと] に基づいて個体であるのでなければならない。そしてこれこそ、何かが多数のものにおいて存在することが本性づけられていないような第二の [すなわち質料的な存在者の場合とは別の] 仕方である。なぜなら、つまるところ、その何かは [他の] 何らかのものにおいて存在することが本

31) Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 8, ad 13.

32) Cf. Thomas Aquinas, *ST I*^a, q. 3, a. 3, c.

性づけられていないからであり、それは、もし白さが基体なしに存在する分離されたものであったとしたならこのような仕方を通じて個的なものであったらということと同様である。そしてこのような仕方では、存在を持つ諸形相である分離された諸実体と、自存する存在そのものである第一原因そのものにおいて個体化はある³³⁾。

「第一原因」は神のことであり³⁴⁾、「分離された諸実体」は主として天使のことである³⁵⁾。ここでは特に、個体化という概念との連関で天使が「存在を持つ形相」として捉えられていることに注目したい。これは神が「自存する存在そのもの」であると言われていることと対照的である。『神学大全』の創造論の箇所でも言われるように、自存する存在はたった一つのものでしかありえないので、神以外のすべての被造物は存在を分有するしかない³⁶⁾。「存在を持つ形相」という表現には、被造物の中でも最も高次のものとされる天使ですら存在を分有しなければならないという側面が含意されていると言えよう。ところで、トマスの思想においては、天使以外の被造物は、天体も含めてすべて質料を持つものである。逆に言えば、トマスによれば、被造物の中では天使だけが非質料的なものである。それゆえ、被造物の中では天使においてのみ個体化の原理が形相であるという定式が適用できることになる。したがって、「存在を持つ形相」という規定を天使に対する個体化の原理を措定するために何らかの仕方を取り入れるなら、天使と神の間で差異化がはかれるような仕方では個体化の原理を定式化することができるようになる³⁷⁾。ただし、「存在を持つ形相」は天使そのもののことであるため、個体化の原理としての形相を取り出すためには、「存在とは別の形相」という規定

33) Thomas Aquinas, *Super De causis*, 1.9.

34) 『「原因論」注解』の中でも第一原因が神のことであるとしばしば言い換えられている。Cf. Thomas Aquinas, *Super De causis*, 1.2.

35) 「分離された実体」という表現は『「原因論」注解』ではこの箇所にしか出現しないが、別の箇所では「天使」と「知性体」と「分離された知性」が言い換えられている。Cf. Thomas Aquinas, *Super De causis*, 1.5.

36) Cf. Thomas Aquinas, *ST I^a*, q. 44, a. 1, c.

37) Cf. 石田「《individuatō》と《principium individuationis》の多様性」, pp. 160-4. ただし、そこでは後稿を期したように、天使における個体化の原理を定式化するより説得的な議論を試みるのが本稿の目的である。

を新たに考える必要があるだろう。

次に、前節で考察した非受容性の根拠であることが、個体化の原理として措定されるものにおいて明示されている必要がある。例えば、質料的な存在者に関しては「指定された質料」³⁸⁾のような定式化がトマス自身によって行われていることを参考にすべきである。このことのためには、「自身を通じて自存する形相」という要件を活用することができるだろう。

以上を踏まえて、「存在とは別の、自身を通じて自存する形相」を天使に対する固有な意味での個体化の原理として定式化することを提案したい。この提案により、トマスによる個体化理論の重要な要素をすべて明示することが最終的な目的である。すなわち、まず「存在とは別の形相」という規定により、個体化およびその原理の多様性が示される。次に、「自身を通じて自存する」という規定により、非受容性の根拠であることが示される。無論、トマス自身がこのような定式化を行っているわけではない。むしろ本稿で強調すべきは、トマスの個体化をめぐる思想をあくまで理論として捉えようとした場合に、その結果としてこのような定式化が可能であるということである。

結

第1節および第2節では、質料的な存在者と非質料的な存在者の間で、個体化およびその原理（として捉えられるもの）が多様化している側面を提示した。それに対して、第3節では、多様化している個体化の原理という概念において非受容性の根拠であるという規定が本質的な規定として取り出せることを解釈として提示した。そして第4節において、「存在とは別の、自身を通じて自存する形相」が天使にとって個体化の原理であるという定式化を可能な一つの解釈として提示した。

それでは、このような解釈を提示する意義としてはどのようなことが考えられるだろうか。トマスの思想において個体化およびその原理という概念は、天使と複合実体を例にしても明らかのように、実際には多

38) Cf. Thomas Aquinas, *De ente et essentia*, c. 2; *Super De Trinitate*, q. 4, a. 2, c.; *Sententia Metaphysicae* VII, 1.15.

義的なものとして使用されていると見なすことができる³⁹⁾。他方で、特に個体化の原理という概念そのものの本質的な規定として非受容性の根拠（および基体）であるという側面を取り出すことにより、個体化をめぐるトマスの思想を或る一つの理論として捉えることができるようになる。個体化をめぐるトマスの思想にこのような多様性と統一性という二つの観点を見出すことができるなら、この二つの観点を一つの尺度として個体化の原理をめぐる哲学史を描くことが可能になってくると思われる。特に、個体化の原理をめぐる哲学史研究では、或る思想家にとっては個体化の原理が質料であるのかそれとも形相であるのかといった表面的な分類に陥りやすい傾向があるからである⁴⁰⁾。

加えて、本稿では、トマスにとっては非質料的でそれぞれが種的に区別されている天使という存在者に着目することで、個体化をめぐるトマスの思想が天使という存在者についても適用できるものであることが再認識された。すなわち、当然のことではあるが、個体化に関する思想についての考察は、個体化の対象となる存在者が存在論的にどのように捉えられているのかということの理解と直結している。個体化に関する思想の研究が決してトリヴィアルな事柄だけを対象としているわけではないことがわかるだろう。

39) Cf. M. Glowala, *Singleness: Self-Individuation and Its Rejection in the Scholastic Debate on Principles of Individuation*, Walter de Gruyter, 2016. グオワラも、最近刊行されたばかりの著書において同様の見解を表明していると思われる。ただし、individuatō という語を「個性」の意味でしか理解しない点や、神に対して個体化という概念の適用を特に考慮しようとしなない点は、少なくともトマスの思想においては問題であることをここでは指摘しておくことにしたい。

40) 前世紀の哲学史研究でも、特にトマスの思想に関する整理はこの点を免れていないと思われる。Cf. H. Heimsoeth, *Die sechs grossen Themen der abendländischen Metaphysik und der Ausgang des Mittelalters*, 8 ed., Wissenschaftliche Buchgemeinschaft, 1987, pp. 176-81.